

ともなつてその様相を種々に変えること、周囲臓器との解剖学的関係などが第1に考えられ、さらには検査時投与される造影剤の性状、量をはじめ検査体位の適否などについても充分考慮しなければならない。特に幽門部は胃癌の好発部位とされているところから、早期発見を目標とする場合一層慎重な考慮を必要とする。

これらの問題を当科でX線診断を行なつた症例から得られた経験を中心に検討しての一端をのべた。

29. 先天性 Valsalva 洞動脈瘤について

(外科)○今野草二・佐藤礼介・飯田良直

先天性 Valsalva 洞動脈瘤は従来いわれているほど稀な疾患ではない。しかも一旦破裂を起すと症状は急激に悪化し一年以内に命を奪われる悲惨な心疾患である。にもかかわらず当疾患の診断は難問中の難問として敬遠され、いまだに確立された徴候論がない。

わずか5年前までは死亡率100%であつた当疾患も心臓外科学のめざましい進歩により、最近では完全に治療し得るようになった。

一人でも多くの患者が早期に発見され外科治療により救命されることをねがい一般的に症状をまとめて診断の便ならしめた。

本学病理教室の標本を詳細に調べ、また1840年以来90例近くの文献を精査した結果、当疾患には一定の形態的類型のあることを知つた。この類型を骨子として独自の分類を試みた。

各型別に症状、経過、予後がよくまとまつているので臨床的に便利である。なお手術方法についても簡単に言及した。

30. 縦隔洞奇形腫の1手術治験例

(小児科)○橘川幸子

(外科)坪井重雄・山口繁

13才の女子で4才の時肺結核に罹患、以後6才まで治療を続け治癒し、6才で猩紅熱、10才で急性腎炎に罹患したがその後は健康であり、昭和35年度の胸部X線検査でも異常はなかつたが、昭和36年春の身体検査の結果縦隔洞より右方に突出した陰影を発見されこの頃より胸痛、食欲減退、全身倦怠感を訴えるようになり5月24日入院した。現病歴は右側前胸上部に呼吸音微弱を認めたのみで他に異常はなかつた。胸部X線所見その他より縦隔洞腫瘍で比較的前の方にあるものという診断をつけ外科に転科、6月5日手術の結果胸腺に連なつた鷲卵大よりやや大きい奇形腫であつた。術後の経過は良好で7月2日退院した。現在健康とのことである。

31. 口腔軟部組織の血管腫の梱包療法について

(口腔外科)村瀬正雄・高井宏

口腔軟部組織に発生した血管腫の摘出手術は、発生部位によつては非常に困難であり、手術不能の事も時々ある。

私達は、そのような症例に腫瘍部をカットグットで梱包状に結紮し、かつ放射線療法を併用して、好結果を得ているので報告した。

特別講演

動物諸器官の組織化学的研究

解剖学教室教授 飯沼守夫

最近の組織化学の研究方法の進歩は著しいものがあり、それらの方法によつて得られた成果にはまた沢山の新知見がある。

多くの研究協力者とともに多年にわたつて動物の諸器官の組織化学的研究を行なつてきたが、今回は皮膚の付属腺の研究とマウスの腔に関する研究について述べる。

皮膚の付属腺について：エックリン汗腺の組織発生に際し細胞の分化の起る部分において特にアルカリホスファターゼの活性が強い。完成された同腺の明調細胞にはアリカリホスファターゼの活性、グリコゲンの存在が認められ、暗調細胞には酸ホスファターゼの活性が認められる。これらは薬物前或は自然発汗に際し軽微な変化が認められる。アポクリン汗腺にはアルカリホスファターゼ、多糖類、リボ核酸が存在し、これらも薬物刺激に際し変化が認められる。

マウスの腔について：マウスの腔の上皮は人にくらべれば極めて著明な周期的な変化を示す。特に発情期の直前には上皮が極めて厚くなり、普通の重層扁平上皮の上にアルカリホスファターゼ、多糖類に富む細胞の層が存在し、発情期にこの部分がはがれる。脱落するこれらの細胞は単に捨てられるにしてはあまりに諸物質に富みすぎており、受精に何らかの関係を有しているのではないかと考える。性周期にもなる腔の組織学的な変化に比べれば組織化学的な変化は著明であり、一般に組織学的な差異の認められない場合でも組織化学的な差異の認められることが多く、組織化学は生活現象の秘密をとく一つの手段たりうるであろう。

シンポジウム「癌」

I 診断の部

1.) 胃カメラによる胃癌の診断

——特に粘膜癌を中心とする胃粘膜像について——

(三神内科) 講師 荒木 伸

胃癌の治療に対しては幾多の研究がおこなわれているが、現在もお早期発見による早期手術のみが唯一の根治療法である。したがつて早期発見のための診断方法があらゆる角度からおこなわれ、われわれもそのために努力を重ねている次第である。胃癌の診断方法のうち、X線透視による検査は最も量要であり必要欠くべからざるものである。しかし胃癌がその初期像として表層性変化にとどまる粘膜癌の場合には、X線による発見は高度の技術を要し、その発見にきわめて困難を感ずることは臨